古文書、古記録、経巻、聖教などの書跡資料の量は厖大なものです。歴史研究室では、それらの書跡資料について、現在寺院が所蔵されています現状をふまえて、整理し、番号を付け、ラベルを貼り、調書をとり、写真撮影する調査を行っています。そして、作成してきたちょう調書や、写真の焼き付けを使って、その成果として管理にも研究にも役立つ目録を作ったり、資料紹介を行ったりしています。調書の内容を、データベース化する情報処理の作業も行っています。

調査方法は同じでも、調査をしている寺院は数多くあり、それぞれの寺院について、抱えている課題は違います。たとえば、興福寺では活字本の目録の第3冊目刊行、薬師寺では入力しているデータベースの整備公開、東大寺では国宝にまだ指定されていない文書の整理などが、現在取り組んでいる課題です。調査は、南都以外にも、依頼を受けて京都、滋賀などに出かけることもあります。

研究テーマとしては、資料に即した研究を目指して、室員が古文書の用紙の問題や、平城京や寺院の絵図についての研究などをおこなっています。

また奈文研には、1992年に子孫の方から、幕末の都城陵墓の研究者である北浦定政関係の資料が寄贈されました。定政は、平城京条坊復元図を最初に作り上げた人ですが、彼が条里や条坊を実地に踏査したときの調査日誌（野帳）や復元図などが含まれており、それら貴重な資料を紹介する予定です。

文化遺産そのものが、その本来的な場所として存在している奈良におかれた研究室としての認識をもとに、文化遺産の内実としての歴史資料の調査、実態把握と成果公表に今後つとめていきたいと考えています。

考古第二調査室（平城宮跡発掘調査部）

考古第二調査室は調査員4名からなり、洗浄、収蔵、復元を担当する整理作業員5名、実測図の作成やデータベース管理を担う派遣職員4名がこれを支援しています。ここでは発掘調査で出土した土器、土製品の整理、研究をおこなっています。平城宮跡の膨大な出土品は、古代の土器研究の最も基準となる資料です。

発掘現場から持ち帰られた土器・土製品は丁寧に洗われ、接合を検討します。そして、調査次数・出土地点・出土年月日などのデータを書き込み、図面を作成します。人々の生活に密着した食器であり、商品でもあった土器の出土地点や帰属時期を調べ、その生産と消費のあり方を解明することで、奈良時代の歴史をひも解いていきます。

一般の人々にむけたプレゼンテーションとして、復元も欠かせない作業です。復元された土器は標本や展示資料として使われます。また、文字や絵の書かれた墨書土器や施釉陶器といった注目すべき遺物について、現在データベース化を進めています。

このほか、国際遺跡研究室の唐三彩に関するプロジェクトにも協力しており、古代における施釉陶器についての調査・研究をすすめています。

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK